

異文化コミュニケーション

NEWSLETTER: Intercultural Communication

No. 31 June 1998

INTERCULTURAL COMMUNICATION INSTITUTE
KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES
1-4-1, Wakaba, Mihama-ku, Chiba, 261-0014 JAPAN

〒261-0014 千葉市美浜区若葉1-4-1
神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所
(Phone / Fax) 043-273-2324 (E-mail) icci@kanda.kuis.ac.jp

異文研 6 進法の試み

A New Categorical System for Books of Intercultural Communication

久米 昭元 (Kume, Teruyuki)

This is a brief note on six categories developed for the classification of books for the Library of Intercultural Communication Institute.

自分が必要としている書物を探すときに、われわれはどの程度図書館を利用しているのだろうか。個人的には閉架式よりは開架式の図書館の方が好きであるが、それでもたまにしか足を運んでいない。なんとなく使い勝手がよくないという印象をぬぐいきれない。その理由のひとつに、日本の図書館が日本図書十進法で分けられており、比較的新しい分野の図書、たとえばコミュニケーション関係の図書は哲学、語学、メディア論、社会心理学などに広く拡散しており、見つけるだけでも至難の技であるからではないだろうか。日本では個々の研究者が自分自身で必要な書籍を購入し、自分の周囲に抱え込む傾向があるが、それは日本の図書館の使いにくさということにも遠因があるのかもしれない。

異文化コミュニケーション研究所(異文研)の図書室には現在、4,000冊(和書が約7割)程度の蔵書があり、小規模ながらひとつの専門分野を広くカバーする図書室として、収集活動を続けている。過去10年間で直面してきた課題は、購入する図書のスペースの確保とそれらをどの様に分類して書棚に配列するかということであった。そして、ようやく最近になって6進法による分類法がほぼ確立したのでその概要を述べたい。

先述の日本十進分類法は以下の通りである。000総記 100哲学・宗教 200歴史・伝記・地誌 300社会科学 400自然科学 500工学・技術 600産業 700芸術 800語学 900文学。これに対して数々の試行錯誤を経て、異文研が定めた分類方法は6進法であり、それは次の通りである。A 総記 B コミュニケーション C 文化 D 異文化コミュニケーション E 日本 F 世界各地域。この6進法に基づき、それぞれの

カテゴリ毎に下位分類を行った(当ニュースレターの7頁に記載)。

総記には、異文化コミュニケーションに関連がある百科事典など各種事典、辞書、用語集、大学便覧、コースカタログなどを含んでいる。コミュニケーションには、コミュニケーション理論の他に集団、メディア、スピーチ・コミュニケーション、非言語コミュニケーションなどが含まれている。文化には言語、哲学、歴史、宗教、社会、語学、芸術など日本十進法で分類されているもののほとんどが含まれるが、それは文化を人間がコミュニケーション行動をとる際の指針の役割を果たす知識の集積とみなしているからである。

異文化コミュニケーションの中にはコミュニケーションと文化が交差する領域をカバーしたものが含まれている。例えば、文化圏、言語圏、宗教圏、人種、民族、国籍、地域、世代、性別、など背景を異にする人々の間で行われる接触、交流、説得、適応、変容、受容、屈折、交渉などの諸現象を扱ったものがこのカテゴリの中に入る。

日本という分類の中には、日本人論や日本の地理、歴史、大衆文化など日本に関したもので、世界各地域には、地球全体を10の地域に分け、その中の下位分類を国別に配列している。これらの2分類は地域文化研究とみなされるものである。

上述の分類に基づいて図書が開架式に配列されている。いかなる題名の書籍でも6進法のどこかに当てはまるようになっていく。従って、当図書室は異文化コミュニケーションの視点から整理した小規模の専門図書室として位置づけできるのではないだろうか。これまで、一般の図書館では、探しにくかった本、例えば、非言語メッセージ、カルチャーショック、国際理解教育、異文化適応、国際交渉、～人の価値観、イメージ、異性間コミュニケーション、偏見、日米関係、日韓関係など、当図書室では関連する書籍を集中的に手に取ることができる。

異文研の歴史もまだ浅く、収集する側の能力や財政的な制約もあり、充実するのはまだずっと先のことになるだろうが、それなりの利用価値が出てきたのではないかと考えている。積極的な利用と助言をお願いしたい。(神田外語大学教授、Professor at Kanda University of International Studies)

情報グローバル化と異文化 Information-Globalization and Intercultural Studies

高崎 望 (Takasaki, Nozomu)

Today, major communication media and networks which are covering all the world are the fruits of digital technology. However, digital technology can not be accepted by some ethnic cultures. How can Intercultural Studies deal with this recent phenomenon?

We are facing a rapid and drastic innovation in communications media such as multimedia, ISDN, satellites etc. The internet is soon going to cover all the world in a convergence of voice, sound, image and now even virtual reality.

On the other hand, deregulation and liberalization are becoming worldwide trends. As a consequence of this, intercontinental and intercultural business alliances have been organized, and are dogfighting with great vigor.

Thirdly, so-called "Information Super Highway"s are growing from national plans to transborder global systems. How can Japan, having a tradition of "analogue" culture, cope with these new waves of digital technologies?

1. 世界を覆いつつあるデジタル網

コミュニケーション論は、その概念区分が言語コミュニケーションであれ、非言語コミュニケーションであれ、また集団であれ、国際であれ、対面コミュニケーションを基本とし、メディアは主として距離を克服するための伝送ツールとして軽く触れられてきた。

ところがこの数年来、急激な技術革新により、デジタル技術が伝送網のみならず、コミュニケーションの内容にまで浸透し、マルチメディアが普及するとともに、いくつかのコミュニケーション・ネットワークが世界をカバーしようとしている。

ひとつが周知のインターネット、第2が巨大ネットワーク企業のグローバル・アライアンス、第3がいわゆる情報スーパー・ハイウェイ構想である。

これらは通信の自由化の波に乗り、異文化コミュニケーションの見地からは暴力的とも映るほど、世界各地に蔓延している。

この三者は出自および目的を異にしながらも相互に関連し合い、世界の通信をデジタル網で覆おうとしている。

2. インターネット文化

インターネットは冷戦の産物として米軍用に開発された分散コンピュータが、米ソ対立解消とともに自由に一般の使用に供されたもので、オーナー不在のまま愛好者によって自己増殖を続け、この2年間

で爆発的な成長を遂げ、21世紀初頭には1億になる予測もある。

インターネットは、すでに単なるコンピュータ網ではなく、マルチメディア化することによってハイパー機能連想を持ち、電子メールからビジネス対話、おしゃべり、ポルノ、大統領のスピーチに至るまで伝送し、情報処理することが可能である。

しかしながら、インターネット英語と称するアメリカ生まれの簡略記号を用いているために、このままではこれが表層的な一種のグローバル・ランゲージとなり、良かれ悪しかれ言語におけるボックス・アメリカナが実現する恐れもある。

また野放しのポルノ開示や詐欺商法の舞台となっているために、厳しい宗教倫理や社会規範を持っている文化圏や、フランスのように自国文化を誇りとしている国々からは強く警戒されている。

アジアでの加入も、香港、シンガポールを除いては甚だ低く、日本でさえその普及率は米国の4分の1程度である。この原因は日本人が英語が不得意なことにあるのではなく、深く日本の文化に根ざすものがあると考えられる。

所詮、インターネットは浅手なアメリカ文化の拡大に終わるのか、各地固有の文化がこれをモディファイするのか、あるいは拒絶するのか、判断するにはあと数年かかるであろう。

3. グローバル・コミュニケーション企業の合従連衡

従来、米国を除いて国家主権と社会基盤構造（インフラストラクチャー）として政府が規制・運営していた通信が、自由化の潮流により、2年前から先進諸国で一斉に自由化され、今や東欧や東南アジアも追隨して、戦国時代にも似た買収・合併の競争場裡となった。

機を見て各国の情報通信企業やベンチャービジネスは、インターネットのホストを取り込みつつマスコミとも合体して、欧米を主として巨大な総合コミュニケーション連合を形成しつつある。

電話事業を例に取ると、欧米・東南アジアは今や3つのグローバル・アライアンスに分割され、資本の論理によって合従連衡をくり返し、今や国境はなきに等しく、小国や異文化圏からは“情報帝国主義”とさえ非難されている。

興味あることは、同一の文化ルーツを持つ英米の間でさえ、ビジネス文化の差から葛藤が生じたり、独・仏が同盟して英と対抗したりしていることである。

これらのアライアンスは、たしかにそのデジタル網で先進国や新興国には大きな利便を与えるであろう。しかしそのカバレッジから外れたアフリカ、シベリア等は、あたかも新幹線から取り残された過疎地域のような恐れがないだろうか。

4. 世界情報スーパー・ハイウェイと文化

上記と同じ危惧が世界情報スーパー・ハイウェイ、正式には世界情報通信基盤（G I I）構想につ

いても考えられる。

これはクリントン政権が米国経済再生の決め手として提唱している全米情報スーパー・ハイウェイ (NII) に各国が一斉に追随、EUのヨーロッパ情報ハイウェイや環日本海情報ハイウェイ等の構想が生まれ、米国が主導して国境を越えて光ファイバ網でマルチメディアによる情報サービスを提供するという構想である。たしかにその美辞麗句はうなづけるが、致命的な問題は米国をリーダーとする政府間主導型であり、国益優先の陰にエスニック文化や少数民族が押しやられてしまうのではないかと危惧されることである。

5. グローバル・コミュニケーション網と異文化

以上、現在地球を覆おうとしている3つのグローバル・デジタル・コミュニケーション網を概観した。この中で最も猖獗を極めていっているのはインターネットである。

しかし仮にインターネット人口が世界の50分の1になったとしても、それが人類に与える文化的影響は、どの程度のものであろうか。現在のインターネット・コンテンツを見る限りにおいて、それは至って低コンテクストの表層的なものであって、かつてハリウッド映画が世を風靡したほどの文化的インパクトを持つとは考えられない。

コミュニケーションは、その性質からして、文化コンテクスト (状況) に強く影響されるものである。いかにうまくコンテンツを処理加工し、メッセージを融合して伝送できようとも、メディアはメディアに過ぎず、コミュニケーションの最終主体は人間対人間である。

情報技術は、メディアを物神化し、人間をデジタル技術というバール神の前に拝跪させようとしているのではなからうか。

6. デジタル技術と日本人

日本は漢字文化圏 (アナログ文字) の一隅にある国として、アナログの伝統文化を育ててきた。

しかしながら独自の島国であることから、漢字文化圏の中でもさらに独自のコード体系を発展させ、高コンテクストのコミュニケーション作法を現在に至るまで保持している。

日本人がデジタル化に違和感を持つのは、マルチメディアを主導してきたエンジニアの発想が、われわれの心の深層に息づいているアナログ文化の遺産を軽視してきたからではなからうか。

またこの違和感は、デジタル的言語のアルファベットを用い、合理的あるいは功利的な思考回路を持つ欧米人に対する違和感とも無縁でないように感ずる。その遠因を探ってみれば、おそらく縄文・弥生時代の昔、山川草木に神を見たアニミズムの歴史を持つ日本人と、一神教の全能の神との激しい契約 (テストメント) のもとに生きたセム族や、それに感化されたアーリア人種との間の文化的違和感かもしれない。

欧米人の尊重する自我と自由は、かつては全能の神エホバ、現在では自己の良心とライフ・スタイルへの忠誠からきているのではなからうか。それを低コンテクストで守ろうとすれば、卓越した雄弁が必要であろう。

デジタル技術こそ、まさしく西洋科学の申し子である。プラトン、アリストテレスの実証主義と論理学が中国文明やサラセン科学を追い越し、産業革命を実現しつつ植民帝国主義によって彼らの科学技術を世界に伝播させ、ついに米国の大衆民主主義を理念として、自動車社会、電化社会を実現させた。

彼らの科学は妥協のない自然との対決であり、その克服であった。

その象徴が宇宙科学、デジタル技術であり、ゴア副大統領が伝導師よろしく信念に満ちて語るように、デジタル技術は人類がそれに帰依すべく現代の祭壇に祀られているのである。

もとより、科学技術の発達は日進月歩である。ラジオはすでに昔話となり、テレビの最盛期は過ぎ、大型コンピュータは凋落し、そして今、マルチメディアとグローバル網のデジタル時代が到来しつつある。

この情報革新は、たしかに電話やコンピュータの誕生に匹敵する第三の情報革命となり、情報化社会の主流となる可能性をはらんでいる。

そしてわれわれは今、否応なくこの西洋の普遍コード体系であるデジタル技術を取り入れつつあるが、日本人にとっては稲作伝来以来、文明は常に外来のものであった。それを悠久の昔から保ってきた大和民族特有の文化と融合させることによって、奈良、室町、戦国、幕末、そして終戦のインパクトを切り抜け、有用なテクノロジーや芸術・文化のみを吸収してきた。

今日、われわれの目前に立ちはだかるデジタル技術を、どのように馴致するかが、日本の課題であろう。(異文化コミュニケーション研究所教授、Professor at Intercultural Communication Institute of Kanda Univ. of International Studies)

参考文献

- 『情報通信ビッグバンへの期待』 (情報通信総合研究所、1997)
- 『高度情報化政策と新技術』 (政府関係資料、1997)
- 磯部浩一 他『情報化時代の産業、技術』 (放送大学教育振興会、1996)
- 高崎望『マルチメディアの現実』 (経済界、1995)
- 『市場開放が進む世界の電気通信』 (情報通信総合研究所、1998)
- 『マルチメディア事典』 (産業調査会、1996)
- Telecoms & Networking. Financial Times, 1998.
- PTC Proceedings '98. Pacific Telecommunications Council, 1998.

Long Distance International Communications.
IBC, 1998.
Asia Pacific Communications. IBC, 1998.

21世紀世代にわれわれは 何が伝えられるか What can We Leave for Growing Generations?

水田 和生 (Mizuta, Kazuo)

Concerning the world trends, I would present a vision from futures studies. With a view on cultural paradigm shift toward sustainability, I argue the importance of cultivating one's awareness of global culture, of making oneself a participating citizen in the changing world.

21世紀に目を向ける前に、まず、20世紀を顧みて、戦争の世界化、東西対立の葛藤、冷戦の終焉、資本主義の発展と大量生産、大量消費、組織的画一的な教育、等などに注意した歴史的把握が目立つ。このような見方では、しかし、戦争の拡大と成長の右肩上がりの「進歩」だけをみていることになる。その視点が見落としてきたものがある。化石燃料への偏った依存と大量消費は、目に見えない形で、ガンになり、公害になり、失業の形になって、現れてきている。資源の枯渇が目に見え始めている。「限界」を超えて、あり続けることは不可能なのである。

さて、そこで私が提案したいのは、次のような考え方である。20世紀世代が犯した過ちを繰り返さないために、我々は、21世紀の世代につたえるものとして、心のグローバル・カルチャー化と、パラダイム・シフトの重要性を考えなければならない。

グローバルという意識は、ビジネスの世界では、かなり以前から使われていたようだが、学術研究者の間では、1980年代になってではないだろうか、とローランド・ロバートソン氏という。氏は、続けて、その意識は、母文化以外の文化を広く、社会・経済的そして環境問題の一部として受容するか、あるいは理解することであるという。この異文化受容の意識は、正に、21世紀の世代がたまねく受け継がなくてはならないものであろう。

異文化を受容するか、理解するかという文脈の中で、異文化は、日本から見た場合の母文化以外の文化—アジアの中でも、東アジア、南アジアの諸文化、ヨーロッパの諸文化、南北アメリカの諸文化、アフリカ、中近東の諸文化—と考えると同時に、グローバルな意識、今世界が共通して、直面している諸問題を意識する、そういうメンタリティではないだろうか。そうだとすれば、共有される諸問題とし

て、次のような事項が挙げられよう。

諸問題は、例えば、国連大学、アメリカ審議会の纏めたものによると、以下のような事項である。

1. 世界の人口は頂点に達して、なお増え続けている。
2. 人口増加は食糧、水、教育、住居、医療等もそれと平行して対応しなければならない状況を提出する。
3. 経済発展と所得格差、経済発展と環境問題。
4. 決定能力の低下。
5. 婦人の地位の変化。
6. 宗教・民族・人種の軋轢の増大。
7. 情報技術の可能性と失業の危険性。
8. 犯罪組織の活動の世界化と巧妙化。
9. エネルギーの消費と資源の有限性の問題。
10. HIV拡大や新しいインフルエンザ、免疫性のある微生物の出現等である。

また、次の世紀を担う世代は、日常生活のパラダイム・シフトを計らなければならない。パラダイム・シフトは、グローバル・カルチャーを議論するかたわら、同時に、自分が住む地域や組織と関わらなければならない、という認識からはじまる。

私は、パラダイム・シフトについての論文で、歴史の傾向（政治経済的变化、東ヨーロッパ、中国の解放政策）、炭素化合物、きれいな空気を取り戻す運動、酸性雨、原子力発電所事故、月面着陸、もっと食べ物を、等の項目について考察した。さらに、シナリオで、2010年のためのバラ色のシナリオ、ノーマン・マクラエ氏の予測、グローバル・カルチャー、第三文化人間の養成、人間中心の生活？ニュー・パラダイムは、誰のために、というような、項目について観察をまとめた。その観察は、私の文化の複雑系モデルを基に、政治・経済・科学・技術が私達の日常生活をどう縛っているか、という問題についてのものである。そして、論文の結末部分では、その観察の結果として、パラダイム・シフトは生活意識の転換を促し、そうすることによって、より豊かな在り方を持続可能にすることができることを提言している。

日常生活のパラダイム・シフトは、20世紀の政治的拡大主義、化石燃料への片寄った依存と大量消費等を顧みて、有機菜園、河川・森林管理、自然的ゴミ処理、省エネとリサイクルの実践、太陽熱利用と断熱材の使用等の有効性を実感することから始まる。生態的倫理が最優先されるようになる。以上のような諸問題について、21世紀の人々を教育する要求が高まってくるだろう。

こうしてみると、21世紀の世代に伝えられるものは、文化理解についての考え方、生態的、有機的な人間存在の在り方を見直した「ニューシンキング」なのである。新しい考え方は、具体的には、グローバルな視点と意識で、さらに自らのパラダイムを転換し、自らが世界市民の一人としてローカルな

事象が有機的・生態的に、またグローバルに連携していることを確信することである。文化の多彩性と複雑性、政治や経済体制の多様性、情報時代の職場、新しい家族の在り方等について、人間の再生を指向する共同体的意識を生活の場に取り込むことによって、21世紀の世代は参加型の世界市民として、より豊かな生活を維持し可能にすることができる、ということなのである。(京都産業大学教授、Professor at Kyoto Sangyo University)

参考文献

- Glenn, Jerome C. and Theodore J. Gordon, et.al. *1997 State of the Future-Implications for Actions Today*. Washington, D.C.: American Council for The United Nations University, 1997.
- Mizuta, Kazuo. "Cultural Paradigm Shift Toward Sustainability" ed., by Kaoru Yamaguchi. *Sustainable Global Communities in the Information Age-Visions from Futures Studies*. Praeger Publishers, Westport, Connecticut. Praeger Studies on the 21st Century, 1997.
- Robertson, Roland. *Globalization-Social Theory and Global Culture*. London: Sage Publications Ltd., 1992.
- 水田和生『比較生活文化学序説』改訂版(白馬社、1998)

インターネットを介した異文化関連情報 Intercultural Information via the Internet

野澤 和典 (Nozawa, Kazunori)

The Internet is truly beginning to affect every aspect of our lives including schools. The educational implication of the Internet use in EFL/Intercultural Communication classes has become common. This short article describes what is basically available on the net to promote further intercultural understanding of the students and the teachers.

常に一步先を進んで行く米国に追隨して、日本でも1995年に「インターネット(The Internet)」が爆発的に広まり、1996年には「イントラネット(The Intranet)」中心のインフラ構築が一步進んだ。1997年以降は爆発的なブームは去ったが、インターネットそのものは社会基盤としての地位を確固たるものとしてつつある。情報化社会への移行が進むにつれ、一般市民の中に徐々にその影響を与え、変革をもたらしてきている。自ずと「ネチズン(Netizen, Net Citizen)/ネットサーファー(Netsurfer)」が増え、通常のコミュニケーション手段に「電子メール(E-mail)」、専門的な研究情報や意見の交換に「メーリ

ング・リスト(Mailing List)」、研究成果の情報公開あるいはデータの収集の手段として「WWW(World Wide Web)/3W」などが当たり前となりつつある。しかし、「インターネット」に接続していても、まだまだ異文化理解を促進させる公開情報発信基地としてのホームページを持たないホームレスの人たちが多いことは否めない。そんな状況下ではあるが、「インターネット」を介した異文化理解に役立つ情報源を幾つか紹介してみよう。

まず第一に、最も急速に発展を遂げているWWWの世界には、膨大なデータベース(情報源)が世界各地に散在しているが、その中で一般的な異文化理解に役立つ場所の一つにCity Net Travel by Excite (<http://www.city.net>)がある。テキストだけの情報を得ながらの方法も可能だが、分かり易いのはやはり地図から入っていく方法である。訪問したい場所をクリックすれば、どんどん大陸→地域→国→市へと狭まっていき、最終的なデータベースがあるサーバーから公開されている必要な異文化情報が得られる。旅行をする前の情報収集や「もっと知りたい」世界中の市町村や下位文化についての情報が簡単に得られるのである。

また、Multi-CulturalPedia/異文化を楽しみながら学ぶ辞典(<http://www.netlaputa.ne.jp/~tokyo3>)などは非言語情報も盛り沢山あり、気軽に訪問できるサイトの一つである。

次に、異文化コミュニケーション教育・研究関連の代表的なサイトとしては、California State University, NorthridgeのSeminar in Intercultural Communication (<http://www.csun.edu/~hfspc002/656>)、Carnegie Mellon UniversityのIntercultural Communications Center (<http://www.cmu.edu/adm/apap/icc/home.html>)、アジア環太平洋地域情報を主たる対象としたSimon Fraser University at Harbour CentreのDavid See-Chai Lam Centre for International Communication(<http://hoshi.cic.sfu.ca>)、Truman State UniversityのIntercultural Communication(<http://www.truman.edu/academics/11/intercultural.html>)、University of Hawaii at ManoaのIntercultural Communication Homepage(<http://www2.soc.hawaii.edu/css/dept/com/resources/intercultural/intercultural.html>)などがある。また、研究に大いに役立つ電子ジャーナルには、1997年12月に刊行されたThe Edge: The E-Journal of Intercultural Relations(<http://kumo.swcp.com/biz/theedge>)がある。論文や学会情報を含めた有益なサイトとしては、Network for Intercultural Communication (<http://www.pcug.or.au/~jgunn/hmpage1a.htm>)がある。この分野ではリーダーシップを取っている学会 SIETAR International

(<http://aspin.asu.edu/~sietar/welcome/index.html>)や、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所(<http://www.kuis.ac.jp/daigaku/ibunken/icci1.html>)も頻繁に訪れるべきサイトであろう。



WWWの世界以外にも様々な方法で異文化理解へのアプローチができる。例えば、American Intercultural Student Exchange (<http://www.sibling.org>)やICCE/Intercultural E-mail Classroom Connections (<http://www.stolaf.edu/network/icce>)などを通して、クラス、小人数あるいは個人単位で、「電子ペンフレンド(E-pal/Electronic Penpal)」として相互理解のための文通をしたり、外国語としての英語学習者を主たる対象にしたschMOOze University (<http://www.schmooze.com>)/(<telnet://schmooze.hunter.cuny.edu> 8888)などの仮想大学/仮想情報空間などにtelnetというソフトウェアを使い、英語によるチャット中心ではあるが、24時間世界中からアクセスがあるMOOの世界での異文化交流をすることは、大変興味深くまたは新しい発見ができる機会を提供するものであろう。

また、CU-SeeMeなどのソフトウェアと専用回線を利用し、音声・動画・テキストを介してインタラクティブにリアルタイム・コミュニケーションをするTV会議(Video Conferencing)など、周到な事前準備ができており、ネットワーク環境が十分に整っていれば、これまでにできなかったスタイルの異文化理解教育・研究ができよう。上記の例は、膨大な情報資源の利用方法のほんの一部に過ぎない。是非ともアナログの世界ばかりでなく、時間と空間を超えたデジタルの世界へ飛び込んで、これまでとは違う異文化理解教育・研究の方法で自らのイノベーションを試みては如何であろう。(立命館大学教授、Professor at Ritsumeikan University)

参考文献

- 朝尾幸次郎、斉藤典明編『インターネットと英語教育』(大修館書店、1996)
- Kitao, Kenji. *Internet resources: ELT, linguistics, and communication*. Tokyo: Eichosha, Co. Ltd., 1998.
- Sperling, Dave. *The Internet guide for English language teachers*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall Regents, 1997.

The Conference on Interdisciplinary Theory and Research on Intercultural Communicationに参加して

徳井 厚子 (Tokui, Atsuko)

1998年3月19日より21日にかけてカリフォルニア州立大学フラトン校で行われたInterdisciplinary Theory and Research on Intercultural Communicationに参加する機会を得た。この会議はthe Academy for Intercultural Research(AIR)設立総会を兼ね、カリフォルニア州立大学フラトン校とIJIR(International Journal of Intercultural Relations)の共催により開かれたものである。参加者は600名ほどで、主にアメリカ合衆国からであった。AIRは異文化研究のリサーチャー、教育者、トレーナーが一同に会し、アイデアを交換しあい、それぞれの研究領域を拡げ、交流をはかることを目的としている。

私自身は大学で主に日本語・日本事情教育に携わりながら異文化間教育との接点を見いだそうともがいて(?)いる一人で、英語とは縁のない生活をしており、海外の学会にひとりで行かなくては多少不安もあった。しかし、3日間の間に何人かの同様の立場の人達と出会うことができ、また研究方法をめぐっても参加者の方たちと様々な議論ができ(自分自身の未熟さも感じつつ)予想以上のおみやげを持ち帰ることができた。

会議では主にIntercultural Relationsをめぐる理論・リサーチをテーマにした講演・研究発表・シンポジウム等が3日間にわたり行われた。方法論の視点、研究者のバックグラウンドも様々で、また従来とは異なった視点で「異文化」を捉えようとした斬新な発表もあり、「異文化コミュニケーション」の領域(分野)そのものがまだ新しく、多文化化していく現実社会の中で、多様性を包含しながら成長しつつある分野であることを改めて感じた3日間であった。すべてに参加することができなかったため、参加できたものを中心に内容の報告と感想を述べさせていきたい。

シンポジウム・講演は、カナダの多文化社会におけるdominant/non dominant groupの異文化接触の状況について報告されたIntercultural Relations in Plural Societies(John Berry)、心理学の立場から文化をperceptionの視点でsurface culture, deep culture, procedural cultureと捉えたThe Cultural Trilogy: The Roots of Cultural Identity in Pain and Emotion(Edward Stewart)、The Role of Anxiety in Intercultural Communication(Gudykunst他)等、方法論をめぐってディスカッションを交える形で行われたもの

も多かった。

研究発表の主なテーマは Prejudice and Intercultural Knowledge, Self Construals and Context, Organizational Behavior across Cultures, International Business, Intercultural Adaptation, Intercultural Communication in China, Culture and Internet, Cross Cultural Comparisons of BehaviorやFace Negotiationのワークショップ等多彩であった。日本語(人)のコミュニケーションに関する発表にはpoliteness、感情表現の日米比較、management styleの比較等があった。中国、アメリカの諺を価値観という観点から捉えた研究、agingやsilenceをテーマにした斬新な切り口の研究もあり、異文化コミュニケーションの対象領域が様々な方向に拡がっていくことを感じさせられた。異文化という言葉の捉え方はこれまで国と国との間、あるいは民族と民族の間という捉え方が暗黙の了解である傾向が多かったと思うが、これまでとは異なった様々な視点から「異文化」を捉えていくことの可能性も感じた。

一方で、様々な研究のバックグラウンドの違いから、用語の定義をめぐって共通の意味を見いだしていくことの難しさも感じた。例えばadaptation, mindfulness等、異文化コミュニケーションの研究の中で頻繁に使われている用語でもミクロなレベルかマクロなレベルか、あるいはプロセス中心か結果中心の捉え方か、社会文化的な意味か心理的な意味かによってもかなり異なってくる。異文化コミュニケーションのように様々なバックグラウンドを持つ者によって構成されている領域ではまず、用語の定義の捉え方を説明する必要があることを痛感した。しかし、時にはぶつかりあいながらもディスカッションのプロセスの中でお互いの用語の捉え方の相違を認めつつ、共通の意味を見いだしていこうとする過程はまさに「異文化(分野)コミュニケーション」の醍醐味であったと思う。今回このような議論を目の当たりにできたのは貴重な体験であった。こういうプロセスそのものが大切で、必要なのではないかと思った。ただ、研究発表の場合、質疑応答も含めて15分とやや少なく、参加者と十分な討議を行えないケースもいくつかみられた。また、教育など実践的な発表は少なかったことが少し残念であった。

日本の学会のコミュニケーションスタイルでは(日本人のコミュニケーションスタイルとも関連していると思うが)、胸襟を開いて話し合う雰囲気あまりなく、(ポスターセッションのような少人数での会話の時はインフォーマルだがディスカッションというより懇談になりやすい傾向にあるように思う)コミュニケーションのプロセスそのものを発表者と参加者が共に楽しんでいく土壌があまり育っていないように感じる。日本において異文化コミュニケーションのような新しい分野を研究していく場合、方法論や用語の捉え方をめぐって様々な分野間

での「異文化(分野)コミュニケーション」を行う土壌を育てていくと共に、コミュニケーション形態の模索も必要なのではないかと感じた。(信州大学助教授、Associate Professor at Shinshu University)

研究所からのお知らせ

異文研図書分類コード一覧

A 総記	D 異文化コミュニケーション
AA 図書館情報	DA 異文化コミュニケーション論
AB 百科事典	DB 国際関係論
AC 国別事典	DC 日本人の異文化接触
AD 事典・辞典	DD 在日外国人の異文化接触
AE 人名・地名辞典	DE 共文化間コミュニケーション
AF 全集・叢書	DF 国際交流
AG 年鑑・地図	DG 国際協力
AH 学会・団体・研究機関	DH 国際ビジネス
AI 大学の講義題目	DI 平和学
AJ 逐次刊行物・年鑑	DJ 翻訳・通訳論
AK その他	DK 比較文化
B コミュニケーション	DL その他
BA コミュニケーション論	E 日本
BB スピーチ・コミュニケーション	EA 日本論
BC 非言語コミュニケーション	EB 歴史
BD 集団コミュニケーション	EC 宗教・思想・哲学
BE メディア・コミュニケーション	ED 教育
BF その他	EE 政治・経済・経営
C 文化	EF 文芸・芸術・スポーツ
CA 文化一般	EG 大衆文化
CB 哲学	EH 神話・民話
CC 言語学	EI 自然科学・環境・技術・産業
CD 民俗学	EJ その他
CE 社会学・心理学	F 世界各地域
CF 教育学	FA 世界(含 海外事情)
CG 歴史学	FB アジア
CH 政治学・法学	FC 東南アジア
CI 経済学・経営学	FD オセアニア
CJ 文学	FE 太平洋
CK 芸術	FF アラブ・中東
CL 自然科学	FG 北米
CM 産業・技術・工学	FH 中南米
CN その他	FI ヨーロッパ
	FJ ユーラシア
	FK アフリカ
	FL その他

第8回異文研夏期セミナー

今年度も福島県白河のプリティッシュヒルズに於いて、7月31日(金)から8月2日(日)の日程で、「異文化コミュニケーションの実践と課題ーアジアの中の日本ー」をメインテーマにセミナーを開催する。日程は以下の通りである。

第1日目は、まずプレセミナーとして6名の参加者に独創的な研究発表を行って頂き、その後本セミナーに入る。オリエンテーションに続き、メインテーマの趣旨に沿って、東南アジアの歴史・文化・宗教の研究者として著名な神田外語大学学長の石井米雄氏に「東南アジアの言語とアイデンティティ」という演題で基調講演をして頂き参加者とのディス

カッションを通してセミナーへの問題提起とする。夕食時には懇親会を開き、参加者間の交流を図る。

第2日目の午前は、昨年実施の地域文化研究のセッションを発展させた全員参加による全体セッションを2つのテーマで準備した。まず、沖縄の文化研究では第一人者である高良倉吉氏(琉球大学)に「沖縄の歴史と文化」をテーマに沖縄を日本の中の異文化という観点から問題提起をしていただき、続いて、世界の各地で活躍する中国人についての研究で著名な游仲勳氏(亜細亜大学)に「華人と華僑の世界」をテーマに講演していただき、議論を進めていく。午後には、基調講演と全体セッションでの問題提起に基づき、「多文化社会日本の条件」をテーマにパネルディスカッションを行う。

第3日目は、異文化コミュニケーションの研究領域と密接に関連した分野における教育実践方法について、(A)日本語教育と異文化コミュニケーション(佐々木瑞枝、横浜国立大学)、(B)情報革新とアジア的マネジメント(高崎望、神田外語大学)、(C)異文化トレーニングプログラムの開発と実施(桜井高志、桜井法貴グローバル教育研究所)の3つのワークショップを準備した。ここでは、教育現場に即したより実践的な方法論について具体的に討議して頂く。午後は、セミナーの統括として、6つの分科会に分かれて、それぞれのコーディネーターを中心に異文化コミュニケーション研究と教育の諸問題や今後の方向性について討論し、セミナーの成果の確認と次回への方向付けをしていただく(①日本語教育の視点から②異文化トレーニングの視点から③情報のボーダレス化の視点から④異文化交流史の視点から⑤マイノリティ研究の視点から⑥東洋的コミュニケーションの視点から)。

例年、当セミナーでは講師と参加者が役割交代しつつ、お互いに切磋琢磨して学び合うという姿勢が貫かれているが、本年もテーマに沿った議論が大いに展開されることを期待し、関心をお持ちの方々の積極的な参加と支援をお願いしたい。(異文研所長)

参加申し込み方法

ご希望の方には開催案内をお送りいたしますので当研究所までご連絡下さい。申し込み締め切りは6月20日(土)です。尚、研究発表の発表者を参加者の中から6名募集します。また、大学院生を対象にインターンシップ制度(参加費優遇制度)があります。詳しくはお問い合わせ下さい。

異文研講演会予告

第39回異文化コミュニケーション講演会
講演者: Dr. Kenneth Starck (アイオワ大学教授)
日時: 1998年6月19日(金) 18:30~20:30
テーマ: メディア・ウォッチ
—異文化の視点からメディアを読む—
会場: 神田外語学院(東京、神田)

会費: 1,000円(当日払い)

紀要論文募集

当研究所では『異文化コミュニケーション研究』第11号の論文を募集しています。提出期限は8月31日です。投稿規定は紀要の最終頁、及び当研究所のホームページ(<http://www.kuis.ac.jp/daigaku/ibunken>)に記載されています。詳しくはお問い合わせ下さい。

学会・研究会予告

Pacific and Asian Communication Association

太平洋・アジア・コミュニケーション学会

Date: July 11-12, 1998

Theme: Humans Communicating in the 21st Century: Asian, Pacific, and Western Perspectives

Place: Sapporo University

For more information, please contact:

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部英文学系 川島彪秀

Phone: 03-5317-9709 Fax: 03-5317-9336 又は

Dr. Ronald Gordon, Chair. Department of Communication, University of Hawaii at Hilo, 200 W. Kawili Street, Hilo, HI 96720-4091, USA.

The Summer Institute for

Intercultural Communication 1998

Session1: July 15-17 Session2: July 20-24

Session3: July 27-31

For more information, please contact:

The Intercultural Communication Institute

8835 SW Canyon Lane, Suite238, Portland, OR 97225, USA

Phone: 503-297-4622 Fax: 503-297-4695

Pacific Representations Culture, Identity, Media

Date: September 22-25, 1998

Place: University of Canberra

For more information, please contact:

Dr. Elaine Chanter (Conference Director)

Faculty of Communication, University of Canberra ACT 2601, Australia

Phone: 02-6201-2648 Fax: 02-6247-3406

日本コミュニケーション学会(CAJ)

九州支部第5回大会研究発表募集

期日: 1998年10月17日(土)

場所: 西南女学院短期大学(福岡県北九州市)

問合せ: 純心女子短期大学 畠山研究室

〒852-8142 長崎市三ツ山町235

Phone: 095-846-0084 Fax: 095-846-0737